

競技心得	相撲をはじめる競技は審判団の指示にしたがって	わんぱく相撲の禁じ手・禁じ技
------	------------------------	----------------

ア) 競技の心得

すもうは心と体を燃えることを目的に行うものです。お互いの攻めと防ぎによって、正々堂々と競技することです。たとえ練習でも真剣に行い、少しでも油断があってはなりません。勝つために競技するのですが、だからといって、やたらと勝を貪ればかりにとらわれると、競技の方法や態度が悪くなって、良くないだけでなく、危険なことにもなるのです。このことを頭の中に入れて、いつも元氣よく、自分より大きいからとか、強そうだからとかいってびくびくせず、自分より小さいからといって馬鹿にせず、しっかりした態度ですもうをとることを忘れないようにしなければなりません。

イ) 競技前の心得

- (1) 排便をしておくこと。
- (2) 食事は少なくとも1時間前にしておくこと。
- (3) つめは短く切っておくこと。
- (4) 準備運動を十分しておくこと。

ウ) 競技中の心得

- (1) 元氣よく正々堂々と競技すること。
- (2) 口はしっかりとどとて競技すること。
- (3) 禁じ手を使わないこと。

エ) 競技後の心得

- (1) 礼をして終ること。
- (2) 体の調子を整えるため、すぐ休まないで、体操運動をすることを忘れないこと。

オ) その他

- (1) 競技は必ず主審の号令にしたがうこと。

試合

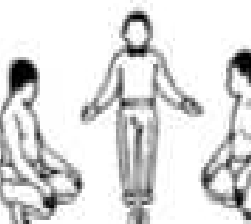
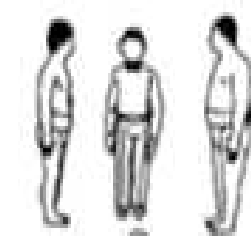
- (1) 叫出しに応じて二字口でまず立礼して競技を行い、勝負が終わったら両方とも二字口で礼をし、勝った者だけがそんなさとして主審より勝名のりを受けること。
- (2) 勝名のりはそんなさの姿勢(立歩脚)のまま目礼して受けること。
- (3) 土俵だまりで足を投げだしたり、土俵で足をこすらないこと

仕切り

両足を左右に開いて腰を落とし、両手をつくが、ふつう両手の間隔は肩幅ぐらい。もっとも大事なことは、この体勢から相手の目をしっかりと見ること。それに土俵上では自分勝手にやらないで、おたがいに相手の動作に合わせることも必要。

土俵

昔の土俵には四本柱があってその上に神明造りの屋根があったが、昭和27年秋場所から観客のびんぎになるというので廃止。屋根はつり天井になり、柱に巻いてあった青、赤、白、黒の柱巻が腰に変わった。土俵の大きさも、3.94メートル(13尺)だったが、昭和6年4月の観覧相撲を機に4.55メートル(15尺)に広がり現在にいたっている。



わんぱく相撲の禁じ手・禁じ技

競技者が禁じ手(1)～(7))を使った場合、審判はすぐ競技を中止せ、審判員の協議の上、負けとする。禁じ技(8)～(15))を使う場合、審判は直ちに競技を中止させ、審判員の協議の上、取り直しする。取り直し後、再度禁じ技を使った場合、審判員の協議により、反則負けとする。ただし、(14)、(15))については競技中に手を松、足り、競技を中止させる必要はない。



(1) 張り手



(2) こぶしで打



(3) 髪をもをつかむ



(4) かむ



(5) 顔ぶくろをつかむ



(6) 向こうがり



(7) 逆・抱



(8) か



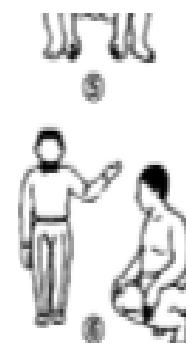
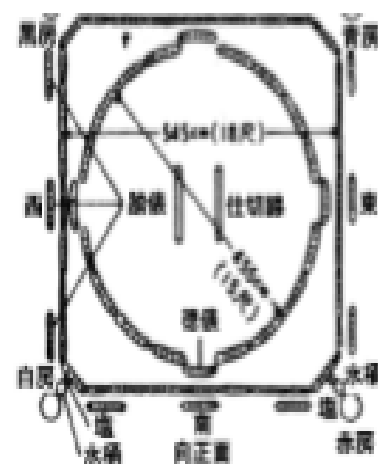
(4) 押の面には押し手二十口で立札をして、両面押手はいずれにも上段に入る
こと)競技を行う。

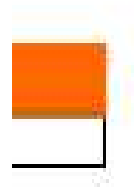
(3) 勝負が終わったならば両方とも二半口で札をし、勝ったものだけがそ
んざとして主審より勝ち名のりを受けること(勝を暗まないようにして土俵
の外に出る)。

(4) 勝ち名のりはそんざの主審目札し受けること。

(5) 土俵だまりで足を投げ出したり、土俵で足をこすらないこと。

(6) 競技に審判員より物言がついたときは、土俵の下におり、主審の指示
により行動すること。





あな
ごき
と
なり
まは



どをつか



わすかけ



2類を相平
の真中より
入り込ませ
る
